

# ライフデザインの時代

第一生命経済研究所 取締役 齋藤 勝彦

日本人のライフコースは多様化してきている。結婚や出産などの家族形成に加え、職業選択や働き方も多様になり、様々な生き方が選択される世の中になった。

家族形成の第一歩といえる結婚については、そもそもしない人が増えている。いわゆる生涯未婚率は、2015年の国勢調査で男性23%、女性14%まで上昇した。1995年には男性9%、女性5%であったから、この20年で大きく伸びたことになる。結婚した場合についても、初婚年齢の分布が拡大している。男女とも分布の山が低くなり、裾野が年長の方に広がった。平均初婚年齢は上昇しているが、人数のピークは男女とも2016年で27歳と、男性は20年前と変わらず、女性は2歳上がっただけだ。一方、40歳代前半の初婚が男性で96年の2.3%から2016年には7.1%に、女性で0.6%から3.9%に上昇した。

このような未婚化・晩婚化の進展は、収入の伸び悩みなど経済的な影響が大きいだろうが、「男性は所帯を持って一人前」とか、クリスマスを過ぎると売なくなるケーキに例えられた「女性の結婚適齢期は25歳まで」というような、古い社会規範的な価値観が消滅したこともあるだろう。相手もタイミングも、さらには結婚すること自体も、自ら選ぶ余地が広がってきたようである。

子どもがいない夫婦も増えている。この20年、40～50歳代前半の夫婦のみ世帯は1.2倍となった。これには別居の子がいる夫婦も含まれるが、結婚期間15～19年の子どものいない夫婦をみると、2015年で6.2%と、1992年から倍増している。40歳代の初産が増える一方、授からなかった夫婦も多いだろうから、すべてが主体的に選んだ結果とはいえないが、子どものいない人生を選ぶ人も増えているのではないかと思われる。

家族形成だけでなく、働き方も多様化している。この20年で正社員の比率が下がる一方、パート、アルバイト、

契約社員、派遣社員など雇用形態の多様化が進み、働き方の選択肢が増えている。育児休業・介護休業など家庭のための休暇制度や、フレックスタイム、在宅勤務(テレワーク)、短時間正社員制度のような柔軟に働くための制度も整備された。

これらの結果として、ライフコースの多様化が進んだ。当研究所の推計では、1940年代後半生まれの団塊世代が30歳代前半の頃は、男性の6割は「有職・有配偶・子あり」だった。また同世代の女性は、同じく30歳代前半で4割以上が「無職・有配偶・子あり」の専業主婦だった。ところが1970年代後半生まれが30歳代前半の頃は、男性の「有職・有配偶・子あり」は4割弱に、女性の「無職・有配偶・子あり」の専業主婦は24%まで低下した。

これらは、本意か不本意かは別にして、皆がそれぞれ自分の置かれた環境で、様々な条件のもとで選択した結果といえる。その点では、生き方・暮らし方の選択肢は増え、多様な選択を許容する世の中になった。

そして、今や皆が目指すような生き方のモデル像が薄れ、自分なりのライフデザインをしなければならない時代になった。ライフデザインは、ライフコースの選択を含め、生き方・暮らし方を総合的に、主体的に設計することだが、「人生100年時代」が視野に入ってきた今日、まさにライフデザインの時代が本格化してきたといえる。

もちろん現実の人生では、限られた情報をもとに様々な選択をしなければならず、設計通りの人生を歩めないことも多い。だから誰でも自分の選択に自信をもてなかったり、漠然とした不安を抱くものである。これからの時代、選択を支援したり選択に伴う不安を和らげてくれるようなライフデザインに関する情報やアドバイスが、より一層求められることになるであろう。